

## 令和4年度東アジアプロジェクト研究報告

### ○プロジェクト名

東アジアにおける文化伝承の研究

### ○研究組織

研究代表者：高橋征仁

研究分担者：柏木寧子、小林宏至、森野正弘、根ヶ山徹、尾崎千佳、更科慎一、和田学、  
谷部真吾

研究協力者：なし

### ○研究の概要と結果

東アジアにおける歴史や文化と、現代におけるその伝承のありかたを浮き彫りにするべく、日中両国の古代から近現代にわたる幅広い研究テーマに取り組んだ。メインとなった活動としては、2022年12月17日に、東アジア研究科比較文化講座の主催による「東アジア比較文化国際学術会議」をWEBミーティング形式で開催した。東アジア研究科の修了生や在学生、教員らが中心となって参加し、10本の研究発表をめぐって、討論を行った。

この国際学術会議によって研究成果の国際化を促進し、国際学会発表数や国際共同研究数を増やすことができた。また修了生たちの研究活動を刺激し、今後の共同研究の基礎作りを行うことができた。

今後、東アジア研究科の修了生を中心とした国際的な研究交流を継続していく予定である。2023年度は、貴州大学などの協定校を基盤として国際会議を開催する予定である。

### ○研究成果の一覧

#### (1) 学会誌等

柏木寧子, 『『今昔物語集』天竺部における釈迦仏入滅の理解』, 『山口大学哲学研究』30, 2023年3月, pp. 17-46

尾崎千佳, 「大名の文事とその展開」, 『山口県史 通史編 近世』, 山口県, 2022年12月, pp. 915-954

森野正弘, 『『枕草子』の鳥が切り拓くクロノトポス』, 『平安女流文学論攷』, 翰林書房, 2023年3月31日, pp. 32-53

根ヶ山徹, 「宮内庁書陵部所蔵徳山毛利家旧蔵和刻本漢籍分類目録(稿)」, 『山口大學文學會志』73, 2023年3月20日, pp. 1-22

高橋征仁・染川みさと, 「美男子平均顔の時代変化と女性の配偶戦略の関連についての一考察」, 『異文化研究』17, 2023年3月31日, pp. 71-84

高橋征仁・吉田由布子・崎山比早子, 「甲状腺がんの若者たちと歩む〈復興〉への道―一世論とアイデンティティ管理―」, 『第8回 震災問題研究交流会報告書』, 2023年3月, pp. 2-15

Robin Goodwin & Masahito Takahashi, Anxiety, past trauma and changes in relationships in

Japan during COVID-19, *Journal of Psychiatric Research* (151), 2022年7月, pp. 377-381  
谷部真吾, 「祭礼の担い手とは誰か—掛川市の三熊野神社大祭を事例として—」, 『まつりは守れるか』, 八千代出版, 2022年9月, pp. 25-40

(2) 口頭発表

小林宏至, 「ネットワーク空間中の民族集団—以全球社会之下的客家话语为例」, 世界格局变革期与东亚地区合作发展新动向, 2022年11月5日, 中国: 山東大学

小林宏至, 「『#客家』という共同体—オンライン空間におけるエスニシティの現在」, 2022年度日本華僑華人学会研究大会, 2022年10月22日, 日本華僑華人学会

森野正弘, 「『教訓抄』に見られる琵琶の伝承」, 聖徳大学言語文化研究所シンポジウム「平安時代の音楽伝承」, 2023年3月4日, 聖徳大学言語文化研究所

森野正弘, 「『枕草子』の鶯が切り拓くクロノトポス」, 2022年度 東アジア比較文化国際学術会議 (テンセント), 2022年12月17日, 山口大学大学院東アジア研究科比較文化講座

森野正弘, 「『教訓抄』に記された他家相伝の様相—多氏の「胡飲酒」「採桑老」をめぐって—」, 水門の会創立60周年記念 神戸・東京合同例会 第9回・水門の会国際シンポジウム「平安楽人、渡来の楽と出会う」, 2022年9月4日, 水門の会

森野正弘, 「楽人と楽家、楽書の形成」, 水門の会創立60周年記念 神戸・東京合同例会 第9回・水門の会国際シンポジウム「平安楽人、渡来の楽と出会う」, 2022年9月4日, 水門の会

更科慎一, 「明の四夷館での外国語教学の実態について」, 山口中国学会大会, 2022年12月24日

高橋征仁, 「子ども会の〈危機〉はどこから来るのか?」, コミュニティ政策学会シンポジウム (ZOOM), 2023年2月19日。

高橋征仁, 「美男子平均顔の女性化と女性の配偶戦略の変化、そして人類の自己家畜化」, 東アジア比較文化国際学術会議 (テンセント), 2022年12月17日, 山口大学大学院東アジア研究科比較文化講座

高橋征仁・染川みさと, 「美男子平均顔の時代変化と女性の選り好み」, 日本人間行動進化学会第15回大会 (北海道大学&Gather), 2022年12月11日。

尾崎千佳, 2022「宗祇「池はうみ」句の成立と享受」, 令和4年度大内氏歴史文化研究会シンポジウム「築山跡と大内教弘—居館から祭祀の場へ—」, 2022年11月27日, 山口市教育委員会・大内氏歴史文化研究会

(3) 出版物

更科慎一, 日本中国語学会編, 『中国語学辞典』 (担当:分担執筆, 範囲:「小児錦」, 「重訂司馬温公等韻図経」, 「ドンガン語」, 「李氏音鑑」, 「交泰韻」, 「五方元音」, 「華夷訳語」), 岩波書店, 2022年10月

---

○プロジェクト名

アジアの教育と文化におけるグローバル化

## ○研究組織

研究代表者：葛崎偉・森下徹

研究分担者：有元光彦・石井由理・北沢千里・熊井将太・佐々木司・鷹岡亮・高橋俊章・  
中田充・松岡勝彦・山本冴里

研究協力者：なし

## ○研究の概要と結果

本プロジェクトでは、グローバル化が進むなかでのアジア各地域の文化の固有な局面を取り上げた言語学や歴史学などの研究、あるいは生物学、情報教育、語学教育や芸術教育などの教育方法・教育制度に関する研究など多面的な検討を進めてきた。2022年度の成果については下記のとおりであり、成果目標値の達成は十分と判断できる。英文の成果もあり、国内外への発信もなされている。

これらの研究は、国際連携、学校連携、地域連携など時間と地域を超えた連携を行いつつ、最終的には、本プロジェクトが一体となって様々な学問的貢献が可能になることを目指したものである。個々人は十分な研究業績をあげているとはいえ、今後はより具体的なテーマを設定した共同研究に着手することが必要と思われる。

## ○研究成果の一覧

### (1) 学会誌等

- ・有元光彦、感動詞の体系 ―連続的に捉える試み―、方言の研究第8巻、日本方言研究会編、ひつじ書房、2022年7月、pp.29-47
- ・黒崎貴史・有元光彦、山口県若年層の用いる同意要求表現ンジャナイ・(ッ) ボクナイ・クナイについて ―〈発見〉場面における用法を中心に―、研究論叢（山口大学教育学部）第72巻、2023年1月、pp.299-304
- ・常艶麗・有元光彦、日本語自然会話の話者間反復における「反復発話」の統語的分析 ―格成分が関わる場合―、研究論叢（山口大学教育学部）第72巻、2023年1月、pp.305-310
- ・劉伝霞・有元光彦、中国語における舌打ち音に関する再検討、研究論叢（山口大学教育学部）第72巻、2023年1月、pp.311-316
- ・石井由理、近代化と国民文化形成における音楽教育の役割、山口大学教育学部研究論叢72、2023年1月31日、pp.95-105.
- ・福田隆眞・石井由理、インドネシアにおける芸術教育と文化形成について：前期中等教育を中心として、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要55、2023年3月15日、pp.77-86.
- ・Kawasaki, S., Yamanaka, A., Kitazawa, C., Change in podial skeletons during growth in the echinoid *Hemicentrotus pulcherrimus*. *Zoomorphology*, 142 (1), 2023年3月, pp.63-75
- ・横山誠、鷹岡亮、中原章宏、義永涼太、小規模校で活用する遠隔合同授業支援環境の開発と評価、東アジア研究、Vol.21、2023年3月1日、pp.125-151
- ・横山誠、鷹岡亮、オンライン授業におけるグループ対話状況確認機能の開発と評価、日本情報

科教育学会学会誌、vol.15、no.1、2022年12月、pp.49-57

- ・新田拓也、堤健人、阿濱茂樹、中田充、鷹岡亮、GIGA スクール時代に求められる教員のICTリテラシーの検討、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 54、2022年8月、pp.131-137
- ・桑原里美、梅本陽翼、山信和也、後藤大雄、高橋俊章、松谷緑、藤本幸伸、猫田和明、ICTを活用したプロジェクト型・課題解決型英語教育、山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要54、2022年8月、pp. 75-85
- ・阿濱茂樹、阿濱志保里、中田充、家庭における情報安全教育のための調査研究 ―児童生徒及び保護者の実態調査に基づいて―、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 54、2022年8月、pp.121-129
- ・中田充、プログラミングの思考を育成する授業に関する考察 算数・数学における授業づくりを中心として、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 54、2022年8月、pp. 111-119
- ・森下徹、萩城下の民衆世界における女性、国立歴史民俗博物館研究報告235、2022年9月、pp.281-195
- ・森下徹、岡山藩の家老知行所と大庄屋組合一水河家文書より考える、吉備地方文化研究33、2023年1月、pp.25-42

(2) 口頭発表

- ・橋本亮、馬場朋美、山中明、北沢千里、クマノアシツキ成体の再生について、2022年度生物系三学会中国四国地区合同大会（島根、オンライン開催）、2022年5月21日
- ・山城友孝、仲村実紅乃、上野翔也、北沢千里、山中明、シロオビアゲハの短日飼育個体における蛹体色発現について、2022年度生物系三学会中国四国地区合同大会（島根、オンライン開催）、2022年5月21日
- ・津村晴仁、上野翔也、北沢千里、山中明、ヒメアカタテハ幼虫に寄生する内部寄生蜂について、2022年度生物系三学会中国四国地区合同大会（島根、オンライン開催）、2022年5月21日
- ・上野翔也、小島渉、北沢千里、山中明、ナガサキアゲハにおける蛹体色発現調節機構について、日本動物学会第93回早稲田大会2022（早稲田大学）、2022年9月10日
- ・津村晴仁、松山颯汰、北沢千里、山中明、アカタテハ幼虫の内部寄生蜂について、2022年度中国四国動物生理シンポジウム（山口大学）、2022年12月10日
- ・山内惇生、大野瑠璃、北沢千里、山中明、ウラギンシジミにおける幼虫体色と環境要因の関係性について、2022年度中国四国動物生理シンポジウム（山口大学）、2022年12月10日
- ・磯村知輝、西村肇、山中明、北沢千里、サンショウウニ属2種における黄色細胞の動態、2022年度中国四国動物生理シンポジウム（山口大学）、2022年12月10日
- ・仲村実紅乃、大野瑠璃、北沢千里、山中明、ウラギンシジミ成虫の越冬能と季節型の関係、2022年度中国四国動物生理シンポジウム（山口大学）、2022年12月10日
- ・高橋俊章、日本人英語学習者の冠詞習得における特定・不特定区別の役割と冠詞習得の段階について、全国英語教育学会第47回北海道研究大会（オンライン開催）、2022年8月7日

- ・森下徹、萩藩の足軽と身分、シンポジウム彦根藩足軽の実態と特徴（彦根城博物館）、2022年8月20日
- ・森下徹、城下町萩と武士の暮らし、高知県立坂本龍馬記念館連続講演会、2022年10月29日
- ・山本冴里、「日本語」の教員が、「日本語母語話者」を対象に、複言語教育をどのように実践できるか、言語文化教育研究学会 第9回年次大会、2023年3月4日-5日

### (3) 出版物

- ・有元光彦、「感激」を表す二連鎖感動詞類の認知プロセス —統一的な理論的枠組みを目指して—、小林隆編、全国調査による感動詞の方言学、ひつじ書房、2023年11月、pp.313-333
- ・森下徹、仲仕、塚田孝編、社会集団史、山川出版社、2022年6月、pp.322-338
- ・山本冴里（編著）、複数の言語で生きて死ぬ、くろしお出版、全205ページ（担当範囲：まえがき、1、2、4、6、10章、あとがき）、2022年4月12日
- ・山本冴里、マイナスを埋めるだけではなくて —教室を多様な音でいろどる活動をしよう—、李曉燕編、学校プリントから考える外国人保護者とのコミュニケーション、くろしお出版、2023年3月24日、pp.183-197

## ○プロジェクト名

東アジアを中心とする世界経済社会に対する感染症問題の影響

## ○研究組織

研究代表者：濱島清史、古賀大介

研究分担者：内田恭彦、有村貞則、立山紘毅、横田尚俊、石龍潭、渡邊幹雄、朝水宗彦、角田由佳、山本勝也、小林友則、齋藤英智、武本Timothy、兒玉州平

研究協力者：なし

## ○研究の概要と結果

元々「東アジアを中心とする世界経済社会に対する感染症問題の影響」のタイトルで共同ないし各自が研究を行ってきたが、2023年3月18日（土）東アジア研究科社会動態講座主催による国際シンポジウム「東アジアのパンデミック」East Asian Pandemicを開催した。

本プロジェクトにおいて、各自それぞれ研究を進めた他、国際シンポジウムに結実して、各自研究成果を発表し、国際的な共同研究への足場を築き、学内外の研究者とも連携を深めた。

今後、これを基に国際共著を刊行し、さらに国際共同研究の発展を試みる事が期待される。